

〔紹介〕

Comprehensive Index to English-Language

Little Magazines, 1890-1970, Series I:

—リトル・マガジン総合索引—

千代由利

はじめに

Kraus-Thomson 社から刊行された、Marion Sadar 編、全8巻の本索引は、1890年から1970年迄の間に刊行された、最も代表的な英語版リトル・マガジン100誌を選定し、それらに記載された散文・詩・演劇関係の論文は勿論のこと重要なさし絵・写真・書評・社会時評に至るまでの全てを含む総合索引である。

I. リトル・マガジンの発生

リトル・マガジンとは、比較的少数の読者を対象にした、通例非営利的な、前衛的文芸雑誌を指す。

いわゆる世紀末と呼ばれる19世紀末期は、イギリス、アメリカ双方に於て、繁栄の陰に見過されていた社会的矛盾が露呈し始め、世の中が大きく変わろうとしている時代であった。それは文学の世界にも、いち早く影響を与え、新しい文学誕生の気運が高まりつつあった。それらの運動の担い手として、リトル・マガジンは登場してきたのである。ヴィクトリア朝の合理主義、道

徳、科学万能主義に反旗を翻し生れ出た、*Yellow Book*, *The Savoy* などに代表される芸術至上主義、あるいは唯美主義という風潮は、拝金主義、ピューリタニズムに抑圧されていたアメリカの雑誌に模倣され、やがて、第一次世界大戦前後のアメリカで、文学革命を推進する重要な役割を果たすことになる。

II. リトル・マガジンの存在意義

リトル・マガジンの存在意義について、Felix Pollak は本索引の序において、次のように述べている。「商業誌には、到底受け入れられないような実験的な作品、すなわち伝統的な文学上の手法やタブーを、一切無視し、少数の理解者のみを対象とした作品に、発表の場を提供してきたことにある。」

こうして、リトル・マガジンは、旧来の文学の伝統的な流れに逆らおうとする若い作家達の実験的な作品に、唯一の表現の場を提供し続け、その結果、常に次代の新しい文学と思想の担い手となり、推進者となったのである。

Poetry は、短命なリトル・マガジンの

中において、1912年にシカゴで創刊されて以来、現在まで継続刊行されている重要な詩誌であるが、T.S. エリオット、ロバート・フロスト、エイミー・ローウェル、エズラ・パウンドらの詩を次々に世に発表し、“*imagism*”運動の新風をひき起した。同誌の編者である Daryl Hine は、「有名、無名を問わず、アメリカの詩人で我々が作品を発表しなかったのは一人もいない。」と言いきっている。また、小説、批評の分野においても、当時、無名であったヘミングウェイ、フォークナー、サリンジャー、リチャード・ライト、サローヤン、ノーマン・メイラー、トルーマン・カポーテ、エドモンド・ウィルソンら、現代20世紀の代表的な作家達も、これらリトル・マガジンの中から生れ育ってきた。*The Little Magazine: A History and a Bibliography*, (2nd ed. Princeton N.J. 1966) の著者の一人である Frederick J. Hoffman もまた、次のように指摘している。リトル・マガジンは「1912年以降の我が国における最も重要な、批評家、詩人、作家達のおよそ80%の作品を発表してきた。さらにまた、過去30年間、アメリカにあらわれた、あらゆる文学運動の紹介者、擁護者ともなってきた。」

貧困の中で各地を転々としながら、作品出版のために、悪戦苦闘し続けていたジェームズ・ジョイスは、その作品 *Ulysses* を1922年になってようやく、パリで出版したが、これも1918年から *Little Review* (一部は *Egoist*) に連載という形で発表してきたものである。このように、彼の作品の中には、*A Portrait of the Artist as a Young Man* (*Egoist* 1-2 (1914-15) に掲載) や、最後の大作となった *Finnegans Wake* (1928年から *transition* に *Work*

in Progress として部分的に発表) など、まず、これらリトル・マガジンに発表の場を求めたものが多い。

このような意義をもつリトル・マガジンではあるが、その非営利的という基本的性格から、経済的基盤が極度に不安定であり、粗末な体裁、編集方針の不安定さ、休廃刊、合併による雑誌の短命さ等の理由から、それらのもつ史的意義の重要性が埋れたまま見過されてしまうという危険性をはらんでいる。しかも、後世名を成した作家達の初期の作品が、作家自身にすら、若気の過ちとして、全集の中にも再録されないまま、これら粗末な体裁の雑誌の中に埋れてしまっている場合が少なくない。これら貴重な作品を、リトル・マガジンの中に発見していくことは、とりも直さず、近代そして現代の文学を史的に跡付け、資料的空白を埋めるのに大いに役立つことであろう。

III. 本索引刊行の意義

しかしながら、こうした試みには、常に困難な問題がつきまとう。第一に、アメリカだけに限っても、1890—1970年間に、2,500余誌にも及ぶ、膨大な数のリトル・マガジンが刊行されていること。第二に、通常それ自体の総索引を発行しているものが、殆どないということである。これまでにも、たとえば下記のような索引が刊行されている。

Index to Little Magazines, 1948- (biennial) Denver, A. Swallow.

(当初年刊で、後2年間の累積版という形で隔年に刊行されている)

Index to Little Magazines. Compiled

by Stephen H. Goode.

1948 (Denver, Colo., 1949)

1943-47 (Denver, Colo., 1965)

1940-42 (New York, 1967)

(1900年まで遡って順次刊行される予定である)。

しかし、これらの索引は、採録誌にリトル・マガジンの盛衰の激しさをみるには貴重な資料ではあるが、カバーし得る期間が限られ、また、採録誌数も多くはなく、全体を把握することは困難である。

本索引、シリーズIは、リトル・マガジンがその本来の機能を事実上発揮し始めた、1890年から1970年までの80年間に、主にアメリカ、イギリスで刊行された最も代表的なリトル・マガジン100誌をその対象とした、全8巻、5,059頁にも及ぶ大作である。これら100誌を刊行地別にみると、59誌までがアメリカであり、イギリスは33誌(アイルランドも含む)、他は、フランス5誌、スイス、カナダ、ニューージーランド各1誌である。大多数は詩誌で、次いで、批評あるいは小説を主としたもので、他に *Camera work: A Photographic quarterly*, *Close up: The only magazine devoted to film as an art*. 等も含まれている。

IV. 本索引の構成

見出し語は人名から成り、アルファベット順に配列されている。各項目内は、works by (標目者による作品), works about

(標目者についての作品)に分けられ、それぞれ、著者名のアルファベット順に配列され、著者名が見出し語と同一の場合は、ハイフンが用いられている。

各記入の構成は以下のとおりである。

- 1 著者, 2 論題, 3 作品のジャンル,
- 4 誌名, 5 巻号, 6 発行年月, 7 頁

なお、人名は *National Union Catalog* (Library of Congress) に基づき、これに含まれないものについては、*Columbia Encyclopedia* 3rd ed. および、Daniel Trowbridge Mallet の *Index of Artists* に準拠し、ペンネーム、変名等を結びつけるために、多くの相互参照が用いられている。

作品のジャンル一覧は、第I巻、List of Abbreviations にあり、採録誌名一覧は、略称、書誌的事項が付され、第I巻巻頭にある。発行年月等の表記については、*Union List of Serials* に拠っている。

おわりに

英米文学研究者にとって、貴重な二次資料となる本索引の刊行は、原資料の存在と相まって有効性を増すのであるが、学術雑誌総合目録によると、我国には、本索引採録100誌中、完全な形ではないが、いずれかの図書館で、24誌が所蔵されている。なお、この索引と共に Kraus-Thomson 社から、本索引採録100誌のバック・ナンバーのリプリント版が、刊行されていることを最後に付記しておきたい。

(ちよ・ゆり 一般参考課副主査)